



人文学部教授
片倉 望

かたぐらのぞむ
文学修士
専門分野は、中国哲学

この記事に関連した情報は以下のアドレスでもご覧いただけます。
<http://www.mie-u.ac.jp/links/research/>

右図／馬王堆三号墓帛書(老子)乙本



言葉の真の意味を理解して 中国古典研究に挑み続ける。

「愛」や「平和」など、明治期に西欧から入ってきた言葉の翻訳語には、あいまいな意味のまま使われているものが数多くあります。人文学部では、こうした言葉がもたらす古典解釈を問題視し、言葉の真の意味をとらえて、正しい解釈を世に発信しようと中国古典哲学の研究に取り組んでいます。



老子図

近代に採用された翻訳語の問題

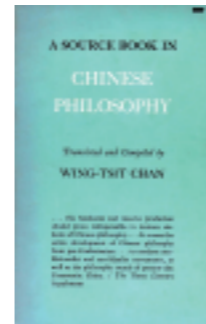
『孟子』という本の冒頭、戦国時代の魏の都を訪れた孟子に、恵王は、「やはり我が国に利益を与えてくださるのですか」と質問します。それに対して孟子は、「王様はどうして利益とおっしゃるのですか。仁義の実践だけが大切なのです」とキッパリ言い切ります。今の大学における中国思想研究も、まあ、そんな立場にあるのではないでしょうか。哲学や思想などと言うと、何か難しそうなことをする学問だと思われがちですが、要するに言葉についての学問だということが解れば、それほど違和感はなくなると思います。例えば、今、私に取り組んでいる「自然」という言葉の問題ですが、我々は気

軽に「自然はいいものだ」とか、「自然を守らなければならない」とかと言ってしましますが、では、あなたの言う「自然」とは何ですか、と聞かれた場合、その問いに即座に答えることができる人はほとんどいないのではないのでしょうか。答えられないのも当たり前で、我々が日常の会話の中で使っている近代的価値を含む言葉の多くは、明治期に西欧の言葉の翻訳語として採用されたもので、その段階で従来の意味とは違う新たな意味が付加され、その意味内容が明らかではないまま、何か新しい好いイメージだけで使われ続けている、そんないい加減な言葉なのです。ですから、「愛」とか「平和」とか「自由」とか、そういう白々しい翻訳語で構成されている近代「社会」というものが、そもそもかなり胡散臭い観念なのですが、それはともかく、私のような古典をやっている人間は、そういういかがわしい近代が作り上げた、ありもしない価値観で古代を理解しようとする過ちを、何とか是正したい、そんな思いで研究を進めています。

自然=natureという解釈の過ち

多少、抽象的になってきましたので具体例で説明しますと、『老子』という中国の古典の中に、「自然」という言葉の最初の用例があるのですが、そこでの「自然」はもちろん nature などという意味で使われているのではなく、単に「自分自身でそうする」という意味で使われているにすぎません。つまり、『老子』の「自然」という言葉には、思想的な意義もなんらの価値も含まれてはいないのです。

ところが、「自然」の意味を nature と思いついでいる近代人が『老子』を読むと、すべてが nature に見えてしまい、結果として、『老子』の思想が「自然」の偉大さを賛美したものであるとか、老子は自然哲学者であったとか、デタラメな老子像ができあがってしまうことになります。さらに、そこに、日本の中国古典研究を模倣した西欧の研究が加わると、事態は一層、複雑になります。一例を挙げれば、A *Source Book in Chinese Philosophy* では、23章の「希言自然」を Nature says few words. 25章の「道法自然」を And Tao models itself after Nature. という風に訳していて、「ああ、自然よ、父よ」のような軽薄な近代的価値が古典に投影された誤訳がなされています。もっとも、さすがに、西欧人でも学識のある Arthur Waley の *The Way and Its Power* では、25章を The ways of heaven by those of Tao, and the ways of Tao by the Self-so. と訳していて、「自然」が nature ではないことを理解してはいますが、それでも、23章の To be always talking is against nature. という訳をみれば、ここでは natural の意味で解釈するという過ちを犯していることが解ります。ちなみに、23章は、「言葉でないもので命令すれば(希言)、人々は自分自身で正しくする(自然)」という意味で、これは、ガミガミ叱ると子どもはかえって勉強しなくなるという日常の親子関係を連想すれば、理解しやすいのではないのでしょうか。



『A Source Book in Chinese Philosophy』
Wing-Tsit Chan著



『The Way And Its Power』
Arthur Waley著

※「アメリカひじき」
野坂昭如の小説。終戦直後、進駐軍の物資の紅茶が何かわからず、アメリカのひじきだと思って煮て食べたというくだりがある。

軽薄短小の世界に抗い、中国古典を研究

このように、本来、漢字を使わない文化圏の人々の中国古典研究は、実は数十年前の日本や韓国の研究を翻案しているものなのですが、未だに欧米信仰から抜け出せないでいる、『アメリカひじき』*の世代の日本人の中には、英訳の『老子』を日本語に訳して、「初めて老子が解った」とか言っている人もいます。もっとも、そんな人の書いた本がベストセラーになる現代の日本の教養レベルも何ともお粗末な次第ですが、そういうインターネット文化と言いますか、軽薄短小の世界の中で、少しはまともなことを言っておきたい、そんな思いで利益にならない古典の研究を続けています。